

2014 年度 研究旅行奨励制度 報告書



オーストリアの環境保護活動と「エコツーリズム」

16AR136 上野優香

目次

1. 研究日程
 2. 目的と期待される成果
 3. 研究成果
 - (1) オーストリアと環境について
 - (2) ビオ
 - (3) エコホテル
 - (4) おわりに
-

■ 研究旅行の目的

20世紀後半以降、「観光」は人類社会を研究する際の重要なテーマとなってきた。そして近年では、ヘルスツーリズム、戦争ツーリズム、コンテンツツーリズムなど新たな観光形態の多様化に伴い、ますますその研究の価値が高まっているといえる。

私は世界的な環境意識の高まりとその具体的な取り組みを事例に関心を持ってきたが、今回の研究旅行では、オーストリアの「エコツーリズム」をテーマにする。観光立国オーストリアは最優先課題の一つとして環境保護活動に積極的に取り組んでいる。首都のウィーンでは「環境に優しいウィーン」と謳い、様々な方法で環境保護の取り組みを展開している。例えば、環境に優しい環境に優しい交通手段として市内に設置された1200台の「シティ・バイク」、ハイブリッド燃料あるいはガス燃料を使った「グリーンタクシー」などを紹介しており、観光客にエコな観光のあり方を提案することで環境への理解を深めることを目的としたエコツーリズムを展開している。また環境の質を上げることで観光促進を図るエコツーリズムも行っている。今回の研究旅行では1. オーストリアと環境について、2. 新たなエコツーリズムとしてのエコホテル、ならびに3. ビオツーリズムについて調査する。実際にオーストリアに行き、オーストリアの人々の環境保護の活動を知るとともに、現地の人から話を伺い、エコを手段、方法とした観光の取り組み（エコホテル、ビオツーリズム）について研究することを目的とする

12月5日	移動日 ウィーン→バードハル	
12月6日	バードハルの住人にインタビュー	
12月7日	バードハル市の役員にインタビュー	
12月8日	農家のマーケットでビオの調査	
12月9日	バードハル→ウィーン 自然史博物館	
12月10日	ウィーン 水利施設	
12月11日	ビオ専門店でビオ製品の調査	
12月12日	移動日 ウィーン→グルブミンゲ エコホテルの調査	

3. 研究成果

はじめに

ヨーロッパ大陸の「心臓部」にあたるオーストリアには、多様で変化に富んだ地形、気候や植生がみられる。オーストリアの地形は、高山・中部山岳地帯から丘陵、そして平野までを網羅しており、ヨーロッパでも特に森林資源の豊かな国に数えられる¹。

自然環境が重要な役割を担うオーストリアの観光部門では、近年、持続可能性に配慮したエコツーリズムへの転換が図られている。

従来のエコツーリズムでは地域資源や自然そのものが観光の対象となっていたが、オーストリアでは、無農薬製品を意味する「ビオ」や環境に優しい「エコ」なホテルがエコツーリズムの一環として取り上げられている。

オーストリアのエコツーリズムの背景にあるものは何か、新たなエコツーリズムのトピックとしてのビオとエコホテルとは何か、人々の生活や意識に注目し、自然環境との関係を考察したい。

(1) オーストリアと環境について

□ オーストリアの観光

オーストリアには毎年多くの観光客が訪れる。その数は2010年の外国人訪問客の数で比

¹ 在京オーストリア大使館ホームページ: <http://www.bmeia.gv.at/jp/botschaft/tokio/oesterreich-information/land-und-leute.html> 参照。

べると約 2.5 倍である。

Table 7. **Austria: Key economic indicators**

Percentage

	2008	2009	2010	2011	2012
Tourism GDP (direct) as % of total GDP	5.3	5.4	5.5	5.5	5.8
Total tourism employment (direct) as % of total employment	7.1	7.1	7.4	7.3	7.5

Source: Statistics Austria, Tourism Satellite Account.


StatLink  <http://dx.doi.org/10.1787/888932985998>

Table 6. **Japan: Key economic indicators**

Percentage

	2008	2009	2010	2011	2012
Tourism GDP (direct) as % of total GDP	2.7	2.6	2.4	2.3	...
Total tourism employment (direct) as % of total employment	4.2	4.0	3.6	3.3	...

Source: Japan Tourism Agency, Japan System of National Accounts, Balance of Payments.

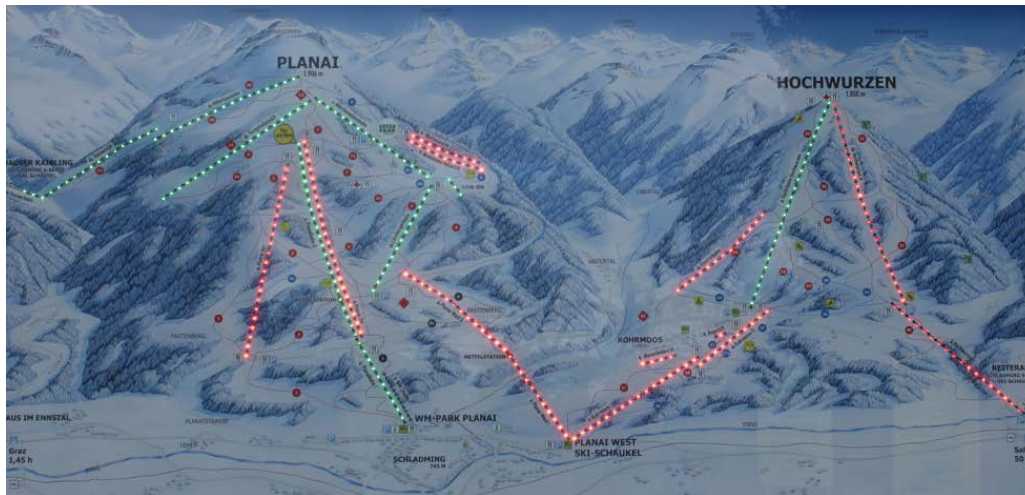
StatLink  <http://dx.doi.org/10.1787/888932987936>

オーストリアへの観光客は年々増え続けており、TSA によると 2011 年のオーストリアの観光 GDP は 5.8%（直接投資）であり、その年の日本の観光 GDP と比べると二倍以上にもなる。（※TSA (Tourism Satellite Account) とは UNWTO が提唱する観光経済の計測手法の国際基準。）

□ 自然とオーストリアの観光

オーストリアにおいて観光産業は経済を支える基幹産業の一つである。オーストリアのツーリズムは自然環境と自然景観に大きく依存しており、ほとんどのツーリズムアクティビティが行われる山岳地帯は最も環境に敏感でもある。オーストリアのツーリズムの最近の傾向はクロスカントリースキーや“adventure”休暇（ラフティング、クライミング、マウンテンバイキング、パラグライディングなど）であり、これらはどれも環境へ悪影響を与える。また自動車（とりわけ山林や牧草地で使われる四輪駆動の自動車）の使用の増加はエコシステムのバランスを崩している。また、スポーツや娯楽への土地の転換は野生生物の居住スペースを奪ってもある²。

² Cf. OECD OECD Environmental Performance Reviews OECD Environmental Performance Reviews: Austria 2003 (OECD Publishing 2003/11/19) p. 88.



(Planai にあるスキー場のコース)

山岳地帯でのアクティビティを始めとする、自然がベースとなったオーストリアの観光は、このような環境への大きな負担を減らすために、近年、Quantitative(量的)から Quality(質的)への転換が図られている。

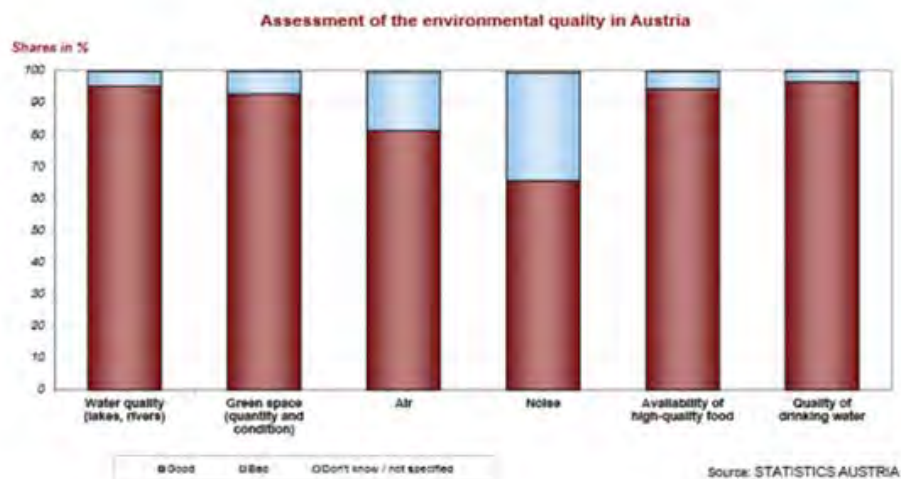
オーストリアの観光において自然環境の重要さは、政府団体および公共部門による多くの方策にも表れている。そして約 15 年間、オーストリアは観光部門をより環境に優しいものへと転換する方針を進めてきた。これは、自然環境が重要な役割を担う観光部門において、自然環境自体の「質」を高く保つための努力が必要不可欠である、との認識からである³。

□ オーストリアと水

自然環境の質を高く保つことが必要とされるのは、先ほど述べたように、オーストリアの観光産業が自然環境に大きく依存しているからだけではなく、生活に欠かせない「水」が自然と大きく関わっているからである。オーストリアで使われる飲料水のおよそ半分が地下水資源、半分が水源地の水が使用されており、ウィーンの上水道はアルプス地方の湧水である。

³ Cf. Austria-OECD <http://www.oecd.org/env/country-reviews/2445595.pdf> (2014/11/04 アクセス)

Quality of the environment



Data source:
Wegscheider-Pichler, A., "Umweltbedingungen, Umweltverhalten, Ergebnisse des Mikrozensus 2007", Statistics Austria, Vienna 2009, by order of the Austrian Federal Ministry of Agriculture, Forestry, Environment and Water Management. Statistical population: Approx. 14 200 persons aged 15 and over, not including persons in institutions.

Definition:
Respondents are to rate the quality of the environment in respect of water, green space, air, noise, the availability of high-quality food and the quality of drinking water as "good" or "bad".

項目（左から） Water quality(lakes, rivers) / Green space / Air /Noise / Availability of high-quality food / Quality of drinking water

2009年のオーストリアのある調査では、「環境の質」に関して、80%を超える回答者が「騒音」を除いた環境の現状に関する項目に関して「よい」と答えており、水に関しては、上の表「環境の質」の「水質」のグラフからわかるように、オーストリアの96%の人々がオーストリアの飲料水の質に満足している。

オーストリアは水の質を保つために、水の質に影響を与えうる「自然環境」を保護することを重要視している。Bad HallのイベントマネージャーのHans-Peter Holnsteinerさんにオーストリアの環境保護活動について伺った際、Holnsteinerさんは水の質とオーストリアの自然環境は大きく関わっており、オーストリアで質のよい水が手に入るということは、豊かな自然に起因しているということをおっしゃっていた。水の質は自然環境が守られていることを反映しているのだ。そもそも、オーストリアではアルプスが国土の三分の二を占めており、自然との距離が近いこと、自然への影響、または自然からの影響がとりわけ強く感じられる環境である。特に水は先に述べたように飲料水のおよそ半分が地下水資源、半分が水源地の水が使用されており、ウィーンの上水道はアルプス地方の湧水である、ということからも、自然を保護することが必要とされる。

オーストリアが積極的に自然を保護する理由として、第一に、オーストリア経済を支える観光産業が自然景観に大きく依存していることと関係している。先ほども述べたように、近年オーストリアは観光部門をより環境に優しいものへと転換する方針を進めてきたこともあり、自然保護への動きはより高まっている。第二に、自然環境が水の質に影響を与えることが起因していると考えられる。オーストリアの地理的条件から、水の質が自然と深くかかわっている。また、水は、生活水や産業、農業分野でも広く使われる重要なものであるため、オーストリア農林環境水資源省による水資源に関するキャンペーンなどの活動が行われるなど市民の水への認識が深められており、質の良い水を確保するための自然保護へとつながっていると考える。

(2) ビオ

オーストリア政府や人々の自然環境への関心は最近では「ビオ」という新たなエコツールの分野を開拓している。

ビオとは、無農薬・有機農法という意味で、オーストリアの人々にはすでに馴染み深いものとなっている。最近ではビオ農場やビオホテルなど関連の市場も増大、ビオ農場ではファームステイを通して、観光客に環境に配慮した農法や、持続可能な農業を紹介されている。

有機農法による農業は、生産された食品が健康的であるということだけでなく、環境保全にもつながるといことが大きな特徴である。従来の農業及び畜産業よりも 30%から 66% 二酸化炭素の排出が抑えられ、また、水に溶け出る硫酸塩が通常よりも少量であるため、地下水は良質で純粋に保たれる⁴。



(ビオのパスタ)

オーストリアのビオの始まりは 1920 年代にもさかのぼる。主に地質や地表水の汚染の観点から、産業化の影響、近代的な大規模農業から起こった環境問題が露呈され始めたころである。しかし、オーガニック、ビオが本格的に市場を広げてきたのはオーガニック農家が政府からの公的助成を受け始めた 1990 年代である。また、オーストリアが EU に加盟したことにより、ビオ農家はさらなる財政援助を受けられるようになった。

□ オーストリアのビオ（有機農業）の規模

⁴ サステナビリティオーストリアワインマーケティング協会
http://www.advantageaustria.org/jp/events/20111101_BioFach.pdf 参照

1990年代初めから、有機農業はヨーロッパのほぼすべての国で急速な発展を遂げた。2006年以降は、ヨーロッパの740万ヘクタールもの土地が20万以上の農家によって有機的に管理された。ヨーロッパの有機農地が世界の有機農地の24パーセントを占めている。

有機農業への調査は国だけではなくEUレベルでも援助されており、2006年には少なくとも6500万ユーロにも及ぶ。下の図『有機農業経営の農地面積比率』で日本とヨーロッパの国々を比較しても分かるように、日本とは格段に違う規模で有機農業の土地が使用されていることがわかる。

(参照)

オーストリア	有機農業経営面積－498000ha	有機農業経営対農地面積－15.6%
日本	有機農業経営面積－9000ha	有機農業経営対農地面積－0.2%



(注) 認証された有機農業経営の農地面積比率である。並びは比率の低い順。2002-04年平均、及び2008-10年平均については、2カ年以下の平均の場合もある。1994年データについては、数字のない国はデータなし、スイス、スペインは1993年、米国、アイスランドは1995年、韓国は1997年、ポルトガル、ポーランドは1998年の値。

(資料) OECD(2013). OECD Compendium of Agri-environmental Indicators



Bad Hall市の農家の人々が主催するマーケットで話を伺った農家の男性は、男性が目指している農業のあり方がバイオ農法と同じであり、共感を得たことから「バイオ農家」として製品をつくり始めたのだという。男性は、主に穀類、粉類とそれらから作ったパスタなどを売っていた。バイオ農家になる前に比べ収入が上がった、という男性の話の通り、バイオ農家の家族労働者当たりの平均収入は従来の

農家よりも 15 パーセント高い⁵。バイオ農場の経営は、環境負荷の低減、農家の収入の増加という面からも積極的な意味を持っている。

□ 生活の中のバイオ

実際にはどのようなバイオ製品があるのか。それを知るためにウィーンにあるバイオ専門店 Denn's Biomarkt を訪れた。この Denn's Biomarkt はオーストリア国内に 17 店舗展開されている。



(店内の様子)

バイオ商品は、一般的なスーパーマーケットでも多くが陳列されているが、Denn's Biomarkt ではバイオ商品のみで一つのスーパーマーケットができており、食品から日用品まで多種多様なバイオ製品が売られている。オーストリアの人々の生活には欠かせない、チーズ、ハム、パン、パスタ、乳製品はもちろん、化粧品、髪染め、乳児向け製品、冷凍食品、アイス、また、味噌や梅などの多くの日本食もバイオ製品としてお店に陳列されていた。

⁵ Cf. OECD OECD, Economic Surveys: Austria 2001, OECD Publishing, 2001.



(ビオの魚)



(ビオのペットフード)

オーストリアの **Bad Hall** 市のある家庭を訪問して、家にあったビオ製品を見せてもらった。話を聞かせてもらった女性によると、ビオ製品は体に良いので積極的に買うようにしているのだという。また、ビオ製品の多くはオーストリアで、または隣のドイツで生産されているため、その地理的な近さからも野菜類は特に新鮮で、質のよい製品が得られる、と考えていることも分かった。女の人が住むバードハル市は人口 5000 人以下のオーストリアの田舎であるが、最寄りのスーパーマーケットでは都市に劣らず多くのビオ製品が簡単に手に入る事が分かり、ビオ製品がオーストリアの人々の生活に定着していることを改めて実感した。



(ビオの食品)



(ビオの洗剤)

ビオ製品にはビオを示すラベルが記されており、簡単にビオ製品を認識できるようになっていた。これ程までにビオ製品がオーストリアに浸透したのは、先ほど述べたように、1990 年代にビオ農家がオーストリア政府、それに続き EU から財政援助を受けられるようになったことに加えて、1995 年にオーストリア大手のスーパーマーケットがビオ製品の市場に参入したことも要因の一つである。多くの人々は、それまで専門店でのみ購

入できたバイオ製品を最寄りのスーパーマーケットでも購入できるようになった。他の製品と比べると値段が高いバイオ製品も少なくはないが、それでもなお市場が拡大したのは、約 50% の消費者が健康を理由にバイオ製品を購入している、というオーストリア政府の報告にもあるように、消費者の「健康志向」もまた、バイオ製品の成功において重要な役割を担っていると考える⁶。

(3) エコホテル

オーストリアでは、自然や環境に優しい「エコ」なホテルが増えてきている。オーストリアはサステナブル（持続可能）な観光分野において世界的に見ても最前線に据わっているが、環境に配慮した宿泊施設の幅広い選択肢がその事実を反映している。太陽光発電機や地下水ヒートポンプなどを使い、エネルギー面から環境問題に取り組むホテルや、食事、備品などにオーガニックのものやエコ認定されたものを使うホテルなど、ホテルによって「エコ」の内容は様々である。

今回、オーストリア政府観光局でエコホテルとして紹介されていたホテルの一つ、**Schloss Thannegg** を訪れた。



(ホテルの外観)



(ホテルの外観)

オーナーの Ernst Schrempf さんがこの地にあった古城を数十年前に改装して、「古城での休暇」をコンセプトにホテルを営んできた。

Schrempf さんは電気技師であったころの経験を活かして、ホテルで使われた水の余熱を最利用する装置を作った。また、以前まで暖房のために年間で 25000L のオイルを使用し 60t の CO₂ を排出していたが、後に CO₂ フリーの暖房をホテルに導入し、現在ホテルは冬でもオイルなしで暖房が機能するそうだ。そして、これまでのエネルギーコストの三分の一に抑えることができたという。さらに、Schrempf さんは現在、電気自動車の充電スタンドの

⁶ Cf. Organic farming in Austria http://www.advantageaustria.org/zentral/news/aktuell/Organic_farming_in_Austria.pdf (2015/3/16 アクセス)

建設を計画しており、「エコホテル」の面を積極的に取り入れようとしている。



(装置を作っている Schrempf さん)



(CO₂フリーの暖房)

Schrempf さんは、毎週月曜日にパワーポイントを使ってゲストにエコツーリズムについての話をし、ゲストと一緒にハイキングへ行く企画などを設けるなどして、自然や環境について考える機会を与える活動を積極的に行うなど、環境に対して強い関心をもっているとはいえ、一般的なホテルとの差別化を図るためにエコラベルを取得し、ある種の「エコ」ブランドとしてホテルを経営している人が多い中で、Schrempf さんはもともとエコホテルを経営している意識はなかった。元はホテルのエネルギーを削減するために造ったという水の余熱を最利用する装置と、それに続いて CO₂ フリーの暖房を導入して以来、メディアや周囲から「エコホテル」と呼ばれるようになり、Schrempf さんもエコホテルとしての意識を持つようになったそうだ。Schrempf さんのホテルは、CO₂ フリーの暖房により州の環境賞グランプリを受賞し、現在では「エコホテル」の一つとしてオーストリア政府観光局サイトで紹介されている。

Schrempf さんはオーストリアでエコツーリズムが発展している理由として、豊かな自然と、水の質を挙げた。Schrempf さんのホテルはオーストリアの Gröbming という町にあり、周囲を山と湖に囲まれた自然の多い場所で、その環境の良さがホテルに滞在するゲストを引き付ける魅力の一つである。それら自然環境は観光資源であるのと同時に、人々の生活水にも影響を与える重要なものである。また、水の質は、人々の生活水に加え、観光産業でも役割を果たしている。バードハル市のイベントマネージャーの Holnsteiner さんによると、1970 年、1980 年代の水質改善計画により、夏の休暇で最も人気のある目的地の一つである湖の水が、飲料水として使えるレベルにまで引き上げられたことで、湖での水泳や水上でのスポーツ、キャンプなどが可能になり、以前と比べてより多くの観光客で賑わうようになったそうだ。

Schrempf さんにインタビューをして、オーストリアの人々がエコホテルを経営するのは、必ずしも自然や環境保護による理由だけでなく、エネルギー削減、コスト削減につながる、といったような経済的な理由が関係していることがわかった。しかしオーストリアでエコ

ホテルがその数を増やしているのはそれだけが理由ではないと考える。先ほど挙げた、環境に優しい製品であることを示すエコラベルを取得した製品が全体で 2007 年には約 450 品だったのに対して、2014 年にはおよそ 3000 品に増えていることから、エコラベルをもつ製品の市場が拡大しており、また、人々の意識、関心が環境に優しい製品に向けられていることがわかる。エコホテル経営における経済的理由だけではなく、環境に優しい製品の需要の高まりがオーストリアでエコホテルの市場を拡大しているのだ。

※エコラベル

エコラベルは製品が環境に配慮されたものであることを示すマーク。消費者がエコフレンドリーな商品を選択する際に役に立つ。

オーストリアのエコラベルは消費者の 50%に認知されており、バイオ製品、エコホテルなど様々なエコ関連のものに取り入れられている。

このラベルの他にもオーストリアには環境に優しい商品であることを示すための様々なエコラベルがある⁷。



(4)おわりに

オーストリアにおいて観光産業は経済を支える基幹産業の一つであり、観光部門は自然環境と自然景観に大きく依存している。そのため、自然の「質」を高め、持続可能なツーリズムを展開する必要があるとの認識に加え、オーストリアの地理的条件下のもと、自然環境が水の質に影響を与えるということが自然保護の動きを高め、オーストリアのエコツーリズムの発展へとつながっていると考える。

1970 年、1980 年代の水質改善計画や有機農家への公的助成など環境に関連した政府主導の活動が活発に行われたことで、人々の環境への意識に大きな影響を与えた。そして、バイオやエコホテルといった新たなエコツーリズムの分野を広げた。

バイオに関しては、政府がバイオ農家に公的助成金を交付して以来その数を急速に伸ばし、製品が「バイオ」となるための公式な管理局が設けられた。一方でエコホテルに関しては、先ほど述べた Schrempf さんのホテルの例から、エコホテルとなるための基準が存在しないということ、また、政府は税金の徴収を目的に、Schrempf さんのホテルの一部の装置に反対しているといったような、政府が必ずしもエコホテルを支援していない状況があることがわかった。このように政府の指導のもとその数を増やしたバイオとは異なり、エコホテルは政府の活動や政策が活発には行われていない。それでもなおエコホテルが増えているのは、オーストリアの人々の環境保護やエコホテルそのものに対する関心や意識が浸透しているからであると考えられる。

一般的に言われるエコツーリズムは、自然そのものに重きを置いた、自然体験型の要素

⁷ Cf. Saddleback Educational Publishing, Recycling Saddleback Educational Publishing 2008.

が大きいが、それに加え、バイオやエコホテルなど新たな側面で人々の環境意識を喚起する役割を果たしているオーストリアのエコツーリズムは先駆的であると考える。